イモで一石三鳥へ

鈴鹿の有志ら

①耕作放棄地の再生目指す
②エネルギー源として活用
③子どもに栽培の過程紹介

鈴鹿市の耕作放棄地で、農業者や経営者、学者らの有志が、イモを栽培して農地を再生させる取り組みを始めた。イモをエネルギー源として活用し、子どもたちに栽培の過程を学んでもらう〝一石三鳥〟の取り組み。六月二日に開墾式と記念講演会を開催して機運を高め、広く啓発する。（村瀬力）

来月2日 開墾式と講演会

企業経営者が組織した「鈴鹿ブレインヴィレッジ（SBV）」と農業者による「鈴鹿エネルギーファーム（SEF）」が連携し、大学教授らを加えた三十二人がメンバーの「ニューファームプロジェクト」の第一弾。

同市石薬師町の約八千平方㍍の耕作放棄地を借り、開墾してサツマイモなどを植える。九月に収穫したイモを生産物として販売。販路に乗らなかった分を千切りにし、乾燥させてチップ状に加工する。それらをストーブなどで燃焼させて、暖房に使用したり、発電用燃料に活用。今年は鈴鹿高専や農家などで実証実験をする。さらに、子どもたちに農業の体験フィールドとして開放。市内の小学校や県立杉の子特別支援学校などが参加する。

農業従事者の高齢化で年々増え続ける耕作放棄地は、景観が悪化し、害獣・害虫の生息場所となることで周辺の農地が荒れる要因となる。一方、鈴鹿市耕作放棄地対策有識者検討委員会の委員長だった明石孝利さんは「原発停止などでエネルギー不足が叫ばれる中、エネルギーを供給する拠点として考えれば、放棄地が資源となる」と力を込める。

当面は〝地産地消〟の取り組みとなるが、SBVの国吉修司会長は「今回のプロジェクトを成功させ、フィールドを広げていければ」と期待する。

二日は午前九時から現地で開墾式を実施。午後二～五時には鈴鹿高専で、近畿大の鈴木高広教授らが「芋エネルギー」の可能性などについて講演する。いずれも参加無料だが、事前申し込みが必要。

問い合わせは平日に鈴鹿商工会議所＝電059（382）3222＝へ。

㊤イモをチップにしたサンプルを手にする国吉会長㊥ら＝鈴鹿市役所で　㊦プロジェクトを行う耕作放棄地＝同市石薬師町で

鈴鹿・亀山版

オフィスを変える力がある
三重リコピー販売株式会社
●津・四日市・伊勢

めだかのうた

〈日曜日〉
私　明日
孫　わか
でも寒い時
も　がんば
みわ・し